



歴史文化の

日進・長久手

南山大学教授 安田 文吉



安田 文吉

一九四五年生まれ。南山大学人文学部教授。幼少から名古屋の芸能文化に親しみ、主な著書に「ゆめのあと 諸本考」「幕末 明治名古屋警津史」がある。「九八七年よりNHK番組「北陸東海文さんの味な旅」などのレギュラーレポーターとしても活躍。

慶

長五年（一六〇〇）の関ヶ原の合戦、慶長八年の徳川幕府開府で、徳川の世となりましたが、ここに到るまでの約百年間は所謂戦国時代。戦の明け暮れでしたが、見方を変えれば実力本位



▲くるりんばす



▲庄九郎塚



▲勝入塚

の自由競争時代。ここで頭角を現したのが、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三英傑。世に小牧長久手の戦いといわれるのは、天正十二年（一五八四）の、秀吉と家康・織田信雄の戦い。小牧・岩崎城前の

戦いとも言われますが、それはこの戦いが小牧から岩崎、赤池辺りまでの広範囲に亘っていたから（武田茂敬氏著『岩崎城の戦』昭和五六年日進市教育委員会刊参照）です。今回の旅はこの戦いの地を長久手の古戦場跡から巡ります。

名古屋からは車で出掛けるのがよろしいかと思いますが、日進市内を循環する「くるりんばす」を利用するのも便利です。「くるりんばす」は、日進市役所から市役所へ「くるりん」と戻ってくる七コース（二日二便）とリニモの「長久手古戦場駅」から市役所を経て地下鉄「赤池駅」を往復する一コース（中央線、一日一〇便）で、一乗車百円（中央線は二百円）。

▼長久手城趾の碑



さ

て、リニモの通る県道六号線古戦場南の交差点の北西角に位置するのが長久手「古戦場公園」。ここだけでも随分広いのですが、戦い縁の地はこの西側北側にも広がっています。まずは郷土資料館手前の「史跡案内図」で場所を確かめて。ここには①木下勘解由塚②堀久太郎秀政本陣跡③御旗山④長久手城趾⑤庄九郎塚⑥武蔵塚⑦勝入塚⑧首塚⑨色金山（床机石）が図示されています。

天正十年六月二日の本能寺の変の後、豊臣秀吉と織田信雄の対立が表面化、信雄は劣勢を補うため徳川家康を同盟に引き込み、小牧長久手の戦いは始まりました。

戦いを有利に展開してきた秀吉勢の、大垣城主池田恒興(庄三郎・信輝、勝入齋)、美濃金山城主森長可(庄蔵、武蔵守)、近江佐和山城主堀秀政、三好秀次(豊臣秀次、恒興女婿)は岡崎を攻略すべく、「三河中入」作戦、四月九日、岩崎城へ進軍。一方、岩崎城主丹羽氏次の留守をまかさ



▲首塚

▲鎧掛けの松 (三代目)

▲武蔵塚



▲血の池跡と覚しき所

▲長久手観音堂

の時十六歳でしかも疱瘡を病んでいた)勢は鉄砲や弓矢で激しく抵抗、三度も敵を押し返しましたが、多勢に無勢、城を枕に討ち死。

しかし、これらの軍の動きを前夜から察知していた徳川家康は、疲れて戻りつつあった池田・森・三好軍を仏ヶ根で迎え撃ち、池田恒興・之助(庄九郎、元助、紀伊守。岐阜城主。恒興長男)父子、森長可が戦死。秀吉が援軍に駆けつけた頃には家康軍は小幡城へ、さらに小牧城へ撤退し、秀吉にとっては後の祭り、為す術はありませんでした(『岩崎城の戦』参照)。これで家康は豊臣政権下での地位を確保、将来への布石とした(『國史大辭典』参照)のです。

古戦場公園はこの戦いの跡。古戦場公園の丘の中腹にある⑦勝入塚は池田恒興戦死の所。その南に⑤庄九郎塚。その西、少し離れた所に⑥武蔵塚。森長可は異名を鬼



▲安昌寺本堂

武蔵と言ったところからこの名称。さらに西へ行くと④長久手城址。長久手城主加藤太郎右衛門忠景(丹羽氏次の姉婿)は岩崎城の戦いで討ち死。文化六年(一八〇九)忠景の子孫の尾張藩士が、ここにあった観音堂脇に石標を建てて供養したということ。

ここから少し東へ戻ると血の池公園。現在池はありません。家康方の武將渡辺半蔵らが血の付いた槍・刀を洗ったのでこの名が付きましたが、毎年合戦があった頃になると池の水が赤く染まったと言っています。

その血刀などを洗うとき、鎧を掛けたという鎧掛けの松があります(現在三代目)。ここから県道六〇号(名古屋長久手線)に出て東(右)へ県道五七号(瀬戸大府東海線)との丁字路を長久手町役場の方へ、香流川に架かる小さな岩作橋を渡ったらすぐ右へ、しばらく旧道を行くと⑧首塚。これは、合戦で亡くなった将兵の供養のため、岩作村(当時)安昌寺住職雲山和尚が屍を埋葬して築いた塚。その先を左折、寛政元年(一七八九)に建てられた「山門鎮護秋葉山常夜灯籠」を見て、県道五七号を渡ると安昌寺。



▲秋葉山常夜灯



▲不動明王と石像群



▲菊水の瀧

ここから日進市役所へ。かねてからの知己田中民雄副市長の紹介で、日進市社会教育指導員(前同市立西小学校長)の田中八隆先生のご案内で、この後のコースを廻りました。

まずは県道五七号線沿いの弁天池とその向かい側の菊水の瀧、御嶽山へ。菊水の瀧は県道から脇道へ少し入った左側、お不動さんを中心にした石仏群の奥。糸のような細い瀧。この山頂に岩崎御嶽社。五七号線へ戻り、南へ少し行くと岩崎城趾公園。

築

城年代は不明ですが、中世の山城機構跡として貴重な存在。織田信秀の支城（城主荒川頼宗）だったのを、岡崎の松平清康（家康祖父）が享禄二年（一五二九）に攻略、尾張侵攻への拠点としましたが、清康は天文二年（一五三三）家臣に殺され（これを「守山崩れ」とい）ました。織田信秀は好機到来と岡崎城を攻めますが、大樹寺の戦いで敗北。結局織田・松平両勢力が岩崎城に及ばなくなり（岩崎城歴史記念館刊「岩崎城の歴史」参照）、その間隙を縫って

土豪丹羽氏清が天文六年占拠、城主となり、以後氏識、氏勝、氏次と続き、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の合戦後、氏次が三河国伊保（豊田市内）へ移るまで約六〇年間、丹羽氏の居城となりました。余談ですが、信長が天文二〇年に岩崎城を攻めた時、丹羽軍は岩崎城南西の横山（現南高山・北高山）麓で迎え撃ち、狭小の地を行く信長軍を三〇挺の鉄砲で攻撃、信長軍は大敗。この経験が後の桶狭間の戦いに活かされた（「岩崎城の戦」参照）のだそうです。



▲ 展望塔岩崎城から横山を望む



▲ 岩崎城址歴史資料館



▲ 御嶽社参道石段



▲ 展望塔岩崎城

▼ 丹羽氏重野銅像



▼ 岩崎城空堀



▼ 岩崎城隅櫓跡



▼ 岩崎城井戸跡



▼ 岩崎城古墳



▼ 緑釉の蓋



閑

話休憩、正面から入ると、右に天守閣かと思いきや展望塔岩崎城、左手は歴史記念館（月曜休館、午前九時〜午後五時、入場無料）。展望台では三六〇度の絶景が楽しめます。ここは岩崎御嶽社のある六合山に続く丘陵地帯の先端部を切り取った地（この部分は空堀とする）で、城には打って付けの所。歴史資料館では、手槍

を持って馬に跨がった丹羽氏重の銅像が迎えてくれます。館内には、丹羽一族と戦の資料及び猿投山西南麓古窯跡群からの出土品を展示。平安時代から瀬戸物の祖ともいわれるべき緑釉・灰釉陶器などの一大生産地であった事がわかります。建物の外には、隅櫓跡、井戸跡、岩崎城古墳、土塁、空堀、曲輪などがあります。



妙仙寺山門天井絵

妙仙寺山門



丹羽氏の墓標



信行両座の場面



妙仙寺境内臥龍の松

こ ことから少し東へ行くと曹洞宗大椿山妙仙寺。丹羽氏代々の菩提寺。創建は永正元年（一五〇四）とも天文六年とも。寛政五年（一七九三）再建ともいわれる山門は三間一戸の楼門（二階造りの門）、天井には赤穂四十七士と瑤泉院の絵。墓地には氏清夫妻の墓碑（石の地藏菩薩）や一族の墓、境内には樹齢約三〇〇〇年の見事な臥龍の松（黒松）。

ここを東へ出て県道二三三号線を左へ、五色園口を右に折れると五色園。中心の大安寺は浄土真宗系の単立寺院。園内は親鸞の教えや逸話を表す多くの塑像によって構成されています。宗教公園は珍しいと思います。

愛知牧場のポニーちゃん



愛知牧場乗馬クラブハウス



愛知池

二三三号線へ戻って南へ、米野木交差点を左折、次の下五反田を斜め右へ、県道二三一号线に入り二本目を左へ、東名高速道路をくぐったところが愛知牧場。可愛いポニーなど見ながらソフトクリームなどを。二三一号线に戻って、最初の信号を左折、県道二三三号線との交差点を左折して愛知池へ。僕が学生の頃は車で池の中央辺りにある観音さんの近くまで行けました。なつかしのデートコース。



龍谷寺山門



龍谷寺山門の仁王（阿形）

再

び二三三号線に出て北進、宮前交差点を左折、最初の信号を右折、二本目を左折すると右手に曹洞宗雲興山龍谷寺と白山宮。白山宮は『尾張志』に「近村無双の古社」とあって、文永十一年（一二七四）の棟札が残っているそうです（日本歴史地名大系『愛知県の地名』平凡社刊）。石の鳥居をくぐった右手に六世紀の白山第一号古墳。撰社に婦人病に効のある香良洲神社、道中の足の安全祈願の足王社など。県道五七号線へ出て右へ進み、岩崎を左へ、香久山小学校の隣が香久山古窯。天井部分を除き、九世紀の窯体がほぼ完全な形で残っています。この古窯跡を含む丘の帯はずすかぜ公園。ここから古代の焼き物に思いを馳せながら今回の旅を終えることにします。田中先生に感謝。



香久山古窯跡

白山第一号古墳



白山宮社



足王社



香良洲神社

